

## 「主の名を呼ぶ系図」

2020年10月28日

セトにも男の子が生まれた。彼はその子をエノシュと名付けた。その頃、人々は主の名を呼び始めた。(創世記4章26節)

レメクはノアをもうけた後、五百十五年生きて、息子、娘をもうけた。レメクの生涯は、合わせて、七百七十七年であった。そして彼は死んだ。(創世記5章30節～31節)

カインの系図は、レメクと子どもたちで終わっている。その系図は罪に膨らんでいる。カインに替わる別の系図が展開されている。「アダムは妻を知った。」妻エバは男の子を産み、セトと名付けた。カインがアベルを殺したので、神はエバにセトを授けられた。セトに男の子が生まれ、エノシュと名付けた。この頃から、人々は主の名を呼び始めた。アベルの代わりに与えられたセトの頃から、主の名が呼ばれ始めた。弟アベルを殺したカインの末裔ではなく、神を求める信仰の系図が始まったということである。この系図がイスラエル史を形成していく。

創世記5章は、神は男と女を神の姿に創造し、祝福されたと書き始め、アダムからノアまでの10代の系図を記している。その系図は単調で、理解できない数字をあげている。形式は「○○は何歳になったとき、△△をもうけた。○○は、△△をもうけた後何年生きて、息子や娘をもうけた。○○は、何年生き、そして死んだ」と定型化している。創世記1章から2章4節aまでの天地創造を書いた「祭司典」グループの規則正しい記述である。そして、奇妙なのは寿命の長さである。一番長い人はメトシェラで969年、一番短い人でも365年で、考えられない数字である。この数字は何であるのか。年の数え方が違うとか、徳川幕府265年と言われるように、一族が生きた年数ではないかという説などがあるが、そうではないだろう。これは、神の祝福によって長寿を得たという神学的な数字ではないか。ちなみに、アブラハムは175歳で死に、モーセは、目はかすまず、気力もうせていなかったが、120歳で死んでいる。詩編90編10節には、「私たちのよわいは七十年／健やかであっても八十年」と歌っている。時代と共に寿命は短くなっている。創世記の著者は神の祝福が長寿を与えたと譬えているのではないか。

この系図の中で、特に惹かれるのは七代目のエノクである。「エノクは六十五歳になったとき、メトシェラをもうけた。メトシェラをもうけた後、三百年、神と共に歩み、息子、娘をもうけた。エノクの生涯は、合わせて三百六十五年であった。エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。」定型を踏まえているが、エノクは365年と短い生涯である。そして、「神と共に歩み」が力説され、死ぬことなく、神が取られたと言う。ヘブライ書11章5節に、「信仰によって、エノクは死を経験することなく天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証しされていたからです」と注解している。神に愛されたエノクは、早々と天に迎えられた。

旧約聖書にはもう一人、死なずに天に昇ったエリヤが描かれている。「彼らが話しながら歩き続けていると、火の戦車と火の馬が二人の間を隔て、エリヤはつむじ風の中を天に上っていった(列王記下2:11)。」エリヤは預言者を代表し、イスラエル人の間で、最も尊敬されている預言者である。主の名を求める系図で、預言者エリヤのように祝福された、エノクのような人もいた。

しかし、アダムからノアまでの十代を過ぎると、地に悪がはびこり、罪が覆っていく。